

一五〇頁

茲に預言者の徒エリシヤに言けるハ視ユ我儕が汝どもに任所ハわれらために論じ請

ム我儕をしてヨルマツに任之めユ我儕のハ彼より一の材木を取て其處に我儕の住べき處を設けん

エリシヤ往よと言ム時にして一人希ハ汝も僕等と共に往けと言ければエリシヤ答へて我ゆかと言

ムエリシヤかく彼等どもに往り彼等すあどちヨルマツにいたりて樹を斫りたふしけるが一人の材

木を斫たふすに方りての斧水におちりしかば叫びて嗚呼主よ是ハを得たる者ありと言ム神の人其

ハ何處におちりしやと言ムにの處をまらせしかば則ち杖を切おとして其處に投ひれての斧を浮

しめ汝これを取れと言ければ人の手を伸てこれを取リ○茲にスリアの王イスラエルと戦ひをり

の臣僕と闘戦して斯々の處に我陣を張んと言れば神のハイスラエルの王に言ふくりけるハ汝慎んで

其の處を過るなれ其ハスリア人其處に下ればなりトイスラエルの王は是に對して神の人が已に告げ已

に敵たる處に人を遣して其處に自防してと二三回に止せざりき是をもてスリアの王是事のため

心をなやましうの臣僕を召て我儕の中誰がイスラエルの王と通じてをかを我に告ざるやと言ムに

臣僕の一八言ム王が主ト然るにわらず但イスラエルの預言者エリシヤ汝が靈室にて語る所の言語をも

イスラエルの王に告るなり王のハいひけるハ往て彼が安に居かを見ユ我人をやりにてこれを執へんと茲に彼

ハドマツに居ると王に告ていハ者ありければ王がこに馬と車および大軍をつかはせり彼等すかはち夜

の中に來りての邑を取てみけるが神の人の從屬風に興て出て見に軍勢馬と車をもて邑を取てみ

居ればの少者エリシヤに言けるハ嗚呼わが主我儕如何にすべきやエリシヤ答へけるハ懼るまかれ

我儕どもにわある者ハ彼等どもにわある者よりも多しトエリシヤ斯りて願くハエホバかれの目を開き

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

て見させたまへと言ければエホバの少者の眼を開きたまへり彼すなち見るに火の馬と火の車山に盈

てエリシヤの四面に在リスリアエリシヤの所に下りいたれる時エリシヤエホバに斯りて言ハ願くハ

此人々をして目昏しめたまへと即ちエリシヤの言のでとくにの目を昏ましめたまへり是に對してエ

リシヤ彼らに言けるハ是ハの途におらず是ハの城にもわらず我に從ひて來れ我汝らを汝らが尋ぬ

人の所に携ゆかんとして彼等をサマリアにひき至れり彼等がサマリアに至りし時エリシヤ言けるハエホ

バト此人々の目をひらきて見させたまへと即ちエホバかれらの目を開きたまひたれば彼等見るにその身

ハサマリアの中に在リイスラエルの王かれらを見てエリシヤに言けるハわが父我撃殺すべきや撃殺

すべきやエリシヤ答けるハ撃殺すべからず汝劍と弓をもて擲にせる者等を撃殺すべしとを爲んやバト

水を彼らの前にそなへて食飲せしめての君主に往しむべきあり王すなちかれらの爲に大なる靈宴

をまらけ其食飲ををばるに及びてこれを去しめられたればすなち其君主に歸れり是をもてスリアの兵ふた

たびイスラエルの地に入ざりき○此後スリアの王ベツハダツの全軍を集めて上りきたりてサマリア

を攻圍みければサマリア大に糧食に乏しくなれり即ちかれら之を攻かてみれば遂に驢馬の頭一箇ハ

銀八十枚にいたり鳩の糞一カブの四分の一ハ銀五枚にいたる茲にイスラエルの王石坦の上を通りたる

時一人の婦人かれに呼はりて我主王よ明けたまへと言ければ彼言ムホバもし汝を助けたまはずバ我

何をもてか汝を助くることを得ん未場の物をもてせんか酒醴の中の物をもてせんか王すなち婦に何

事なるやと言れば答へて言ム此婦人我にむかひ汝の子を與へよ我儕今日これを食ひて明日わが子を食ふべ

しと言り斯われら吾子を養てこれを食ひけるが我次の日にいたりて彼にむかひ汝の子を與へよ我儕と

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

一五〇頁

れを食はんと欲しに彼の子を隠したり。王その婦人の言を聞て衣を裂き而して石垣の上を通りたりしが民これを見るにその肩に麻布を着居たり。王言けるハ今日ヨシヤの子エリヤの首の身の上はすよりをらば神われに欺なしました重ねてかく成たまへ。時にエリヤハその家に坐しをり長老等これと共坐し居る王すなと己の所より人を遣はしけるがエリヤハその使者の未だ已にいたらざる前に長老等に言ふ汝等ての人を殺す者の子が我の首をどらんとして人を遣はすを見るや汝等觀てその使者すらば戸を開てこれを戸の内に入るやなかれ彼の主君の足音の後にするにあらさやと。使者等と語る間にその使者かれの許に來りしが王もつといて來り言けるハ此災ハエホバより出たるなり我なん今此上エホバを待べけんや。

第七卷

エリヤ言けるハ汝らエホバの言を聴け。エホバかく言たまふ明日の今頃サマリアの門にて發劊一セアを一セアを一セアに買ひ大變ニセアを一セアに賣に賣にいたらん。一階に一人の大將すふさち玉のその手に依る者神の人に答へて言けるハ由エホバが天に誓をひらきたまふも此事あるべけんや。エリヤハひけるハ汝の汝の目をもて之を見ん然とて之を食ふとていあらば。茲に城邑の門の入口に四人の癩病人をりしが互に言けるハ我儕なん今此に坐して死するを待べけんや。我ら若邑にいらんと言ば邑に口食物盡てわれば我ら其處に死んも又此に坐しをらば同く死ん然ば我儕ゆきてサリアの軍勢の所にいたらん彼ら我らを生じしかば我儕生ん若われらを殺すも死するのみなりと。すなとちサリアの陣營にいたらんとして黃昏に起あがりしがサリアの陣營の邊にいたりて視に一人も其處に在る者なし。是より先にまサリアの軍勢を去て軍の聲馬の聲大軍の聲を開きめたまひしかば彼ら互に言けるハ視よイサエルの王われらに

五十五〇七

五十五〇八

五十五〇九

五十五一〇

五十五一一

五十五一二

五十五一三

五十五一四

五十五一五

五十五一六

五十五一七

五十五一八

五十五一九

五十五二〇

五十五二一

五十五二二

五十五二三

五十五二四

五十五二五

敵せんとてハ人の王等よハエホバの玉等を備ひきたりて我らに襲えんとす。すなとち黃昏に起て逃げろの天幕と馬と驢馬とを棄て陣營を去るの儘になしおき生命を全うせんとて逃たり。かの癩病人等陣營の邊に至りしが遂に一の天幕にいて食飲じ其處より金銀衣服を持ち去りて往てこれを隠し又きたり。他の天幕にいて其處より持ざりて往てこれを隠せり。かくて彼等互に言けるハ我儕のあすどろ善ら。亦今日好消息ある日なるに我儕ハ馳し居る若夜明まで待たん。爾等身におよむん然そ來れ往て王の眷屬に告ぐ。すなば來りて邑の門を守る者を呼びてこれに告げけるハ我儕サリア人の陣營にいたりて視に其處に一人も居る者なく亦人の聲もせず但馬のみ響きてあり。驢馬のみ響きてあり。天幕の其儘なりと。是に於いて門を守る者呼ばりてこれを王の家の中に報せられた。王夜の中に興いでその臣下に言けるハ我サリア人が我儕になせる所の如何を汝等に示さん。彼等ハわれらの飢たるを知ら故に陣營を去て野に應る。是ハイサエルの八邑を出なば生擒て邑に推いらんとて言て然せるなり。その臣下の一人對へて言けるハ諸公尙遺されて邑に存れる馬の中五匹を取じめよ。我儕人を遣て視はまめん。視よ是等八邑の中に遺れるイサエルの全群衆のごとし。視よ是等の滅び亡たるイサエルの全群衆のごとし。なり。是に於いて二輛の戰車と馬を取り王す。亦はち往て見よ。どのひて人を遣としてサリアの軍勢の跡を尾せられた。彼ららの跡を尾てヨルダンにいたりしが遂にハサリア人が狼狽逃る時に棄たる衣服と器具盈り。その使者かへりてこれを王に告げれば。民いでサリア人の陣營を掠めたり。斯在しかば麥粉一セアの一シケルとなり大變ニセア一セアと成る。エホバの言のごとし。爰に王の手に依りてその彼大將を立て門を司らめたるに民門にて彼を踐たれ。心死し即ち神の人が王のおれに下り來りし時に言たる言のて

五十五二六

五十五二七

五十五二八

五十五二九

五十五三〇

五十五三一

五十五三二

五十五三三

五十五三四

一 至七百一
 二 至七百二
 三 至七百三
 四 至七百四
 五 至七百五
 六 至七百六
 七 至七百七
 八 至七百八
 九 至七百九
 十 至七百十
 十一 至七百十一
 十二 至七百十二
 十三 至七百十三
 十四 至七百十四
 十五 至七百十五
 十六 至七百十六
 十七 至七百十七
 十八 至七百十八
 十九 至七百十九
 二十 至七百二十
 二十一 至七百二十一
 二十二 至七百二十二
 二十三 至七百二十三
 二十四 至七百二十四
 二十五 至七百二十五
 二十六 至七百二十六
 二十七 至七百二十七
 二十八 至七百二十八
 二十九 至七百二十九
 三十 至七百三十
 三十一 至七百三十一
 三十二 至七百三十二
 三十三 至七百三十三
 三十四 至七百三十四
 三十五 至七百三十五
 三十六 至七百三十六
 三十七 至七百三十七
 三十八 至七百三十八
 三十九 至七百三十九
 四十 至七百四十
 四十一 至七百四十一
 四十二 至七百四十二
 四十三 至七百四十三
 四十四 至七百四十四
 四十五 至七百四十五
 四十六 至七百四十六
 四十七 至七百四十七
 四十八 至七百四十八
 四十九 至七百四十九
 五十 至七百五十
 五十一 至七百五十一
 五十二 至七百五十二
 五十三 至七百五十三
 五十四 至七百五十四
 五十五 至七百五十五
 五十六 至七百五十六
 五十七 至七百五十七
 五十八 至七百五十八
 五十九 至七百五十九
 六十 至七百六十
 六十一 至七百六十一
 六十二 至七百六十二
 六十三 至七百六十三
 六十四 至七百六十四
 六十五 至七百六十五
 六十六 至七百六十六
 六十七 至七百六十七
 六十八 至七百六十八
 六十九 至七百六十九
 七十 至七百七十
 七十一 至七百七十一
 七十二 至七百七十二
 七十三 至七百七十三
 七十四 至七百七十四
 七十五 至七百七十五
 七十六 至七百七十六
 七十七 至七百七十七
 七十八 至七百七十八
 七十九 至七百七十九
 八十 至七百八十
 八十一 至七百八十一
 八十二 至七百八十二
 八十三 至七百八十三
 八十四 至七百八十四
 八十五 至七百八十五
 八十六 至七百八十六
 八十七 至七百八十七
 八十八 至七百八十八
 八十九 至七百八十九
 九十 至七百九十
 九十一 至七百九十一
 九十二 至七百九十二
 九十三 至七百九十三
 九十四 至七百九十四
 九十五 至七百九十五
 九十六 至七百九十六
 九十七 至七百九十七
 九十八 至七百九十八
 九十九 至七百九十九
 一百 至七百一百

とし又神の人が王につけて明日の会頃サマリヤの門にて大麥二セアを一
 シケルに賣にいたらんと言じてどくお成ぬ 彼大將の賄お神の人おたへてエホバ天お怒をひらきた
 さん此事あるべけんやと言たりしかば答へて汝目をもてこれを見ればもてそれを食ふてどいからじ
 と言たりしかば 爾のどくお成ぬ民門おてかれを躓て死なめたり
譯入言 エリシャ嘗てその子に躓へらせて與へし婦お言じてどわり曰く汝起て汝の家族とくもお往き
 汝の寄寓んどもおもふ處お寄寓れ其ハエホバ饑饉を呼くだじたまひたれば七年の間この地お臨むべけれ
 ありと 是をもて婦起て神の人の言のおどくお爲しらの家族とくもお往てベリッテ人の地お七年寄寓ぬ
 かくて七年を經て後婦人ベリッテ人の地より歸りしお自己の家と田畝のためお王に呼もどめんとて往
 り 賄お王の神の人の僕ババコおひか請ふエリシャを爲し諸の大なる事等を我お告よと言てこれと談
 話を 爾即ち彼エリシャが死人を甦らせしことを王にものがりたる時おその子に彼が甦らせし婦自己
 の家と田畝のためお王お呼もどめければ王は言ふお王は王は是すなばその婦人お是すなばエリ
 シヤが甦らせしその子なり 王すおまよりの婦に尋ねけるおこれを陳たれば王彼のため一人の官吏を
 派出して言ふ凡て彼お屬する物並お彼がこの地を去じ日より今おいたるまでの其田畝の產出物を悉く彼
 お還せよと 〇エリシャアヌコお至れる事お時おスリヤの王ベシハズ病おかきりなりしおこれお
 つげて神の人おきたるお言ふ者おりければ 王ハエリシャお言ふ汝手お禮物をとり往て神の人を迎へ彼
 およりてエホバお吾この病お癒るやと言て問へ 是お爲いてハエリシャおかれを迎へんとて出往きアヌコ
 のもろくの佳物駱駝お四拾駄を禮物お携へて到りて彼のの前お立ち曰けるは汝の子スリヤの王ベシハズ

一 至八百十五
 二 至八百十六
 三 至八百十七
 四 至八百十八
 五 至八百十九
 六 至八百二十
 七 至八百二十一
 八 至八百二十二
 九 至八百二十三
 十 至八百二十四
 十一 至八百二十五
 十二 至八百二十六
 十三 至八百二十七
 十四 至八百二十八
 十五 至八百二十九
 十六 至八百三十
 十七 至八百三十一
 十八 至八百三十二
 十九 至八百三十三
 二十 至八百三十四
 二十一 至八百三十五
 二十二 至八百三十六
 二十三 至八百三十七
 二十四 至八百三十八
 二十五 至八百三十九
 二十六 至八百四十
 二十七 至八百四十一
 二十八 至八百四十二
 二十九 至八百四十三
 三十 至八百四十四
 三十一 至八百四十五
 三十二 至八百四十六
 三十三 至八百四十七
 三十四 至八百四十八
 三十五 至八百四十九
 三十六 至八百五十
 三十七 至八百五十一
 三十八 至八百五十二
 三十九 至八百五十三
 四十 至八百五十四
 四十一 至八百五十五
 四十二 至八百五十六
 四十三 至八百五十七
 四十四 至八百五十八
 四十五 至八百五十九
 四十六 至八百六十
 四十七 至八百六十一
 四十八 至八百六十二
 四十九 至八百六十三
 五十 至八百六十四
 五十一 至八百六十五
 五十二 至八百六十六
 五十三 至八百六十七
 五十四 至八百六十八
 五十五 至八百六十九
 五十六 至八百七十
 五十七 至八百七十一
 五十八 至八百七十二
 五十九 至八百七十三
 六十 至八百七十四
 六十一 至八百七十五
 六十二 至八百七十六
 六十三 至八百七十七
 六十四 至八百七十八
 六十五 至八百七十九
 六十六 至八百八十
 六十七 至八百八十一
 六十八 至八百八十二
 六十九 至八百八十三
 七十 至八百八十四
 七十一 至八百八十五
 七十二 至八百八十六
 七十三 至八百八十七
 七十四 至八百八十八
 七十五 至八百八十九
 七十六 至八百九十
 七十七 至八百九十一
 七十八 至八百九十二
 七十九 至八百九十三
 八十 至八百九十四
 八十一 至八百九十五
 八十二 至八百九十六
 八十三 至八百九十七
 八十四 至八百九十八
 八十五 至八百九十九
 八十六 至九百
 八十七 至九百一
 八十八 至九百二
 八十九 至九百三
 九十 至九百四
 九十一 至九百五
 九十二 至九百六
 九十三 至九百七
 九十四 至九百八
 九十五 至九百九
 九十六 至九百十
 九十七 至九百十一
 九十八 至九百十二
 九十九 至九百十三
 一百 至九百十四

我を故おつかとして吾この病お癒るやと言じて 〇エリシャおかれお言けるお往てかれお汝ハおからす愈
 べしと告よ但しエホバおかれハおならす死んぞ我おおめしたまふなり 而して神の人腫子をさだめて彼の
 差るおでお見つめ乃て哭いでたれば ハエリシャわが主よ何て哭たまふお言ふおエリシャ答へけるお我
 がおイヌラエルの子孫おおさんてこの害悪を知りばなり即ち汝ハ彼等の城お火をかけ壯年の人を劍おこ
 ろし子等を擡ぎ孕女を剣ん ハエリシャ言けるお汝の僕ハ犬なるか何んお斯る大なる事をおさんエリシャ
 答へけるおエホバ我おおめしたまふ汝ハスリヤの王おあるおいたらん 斯て彼エリシャを離れて去て
 の主君おいたるおエリシャ汝お何と言しお尋ねれば答へて彼汝ハおならす愈るおらんぞ我お告たり
 と言ふ 翌日おいたりてハエリシャ粗き布をとりて水お浸してこれをもちて王の面を覆ひたれば死ハハエリ
 すなばち之おかおとりて王となる 〇イヌラエルの王ハエリシャの子ヨシヤの五年おハエリシャヨシヤの王
 たりき此年おエホバの子ヨシヤの位お即り 彼の位お即り時三十二歳おして八年の間エリサ
 レムにて世を治めたり 彼のハエリシャの家お赤せるおどくおイヌラエルの王等の道を行へりハエリシャの女
 かれの妻おりければなり 斯ハエリシャの目の前お悪をなせしかば 〇エホバの僕ババコのためおエホ
 ばを滅すことを好みたまはざりき即ち彼おその子孫およりて恒お光明を興んと言たまひしがとじ 〇エ
 アの代おエホバお叛きてエホバの手お服せず自ら王を立たれば 〇ヨシヤの一切の戰車を去たかへてガ
 ルに涉りしが遂お夜の中お起わがりて自己を圍めるニハエリシャ人を擡ちその戰車の長等を擡り斯して民ハ
 らの天幕お逃ゆきぬ 〇エホバの手お服せずなりしが今日まで然り此時おわたりてリブナ
 もまた叛けり 〇ヨシヤの其餘の行爲およびの凡て爲たる事等ハエホバの王の歴代志の書お記さるるよ

あざや ヨラムの先祖等ともお變りてオビの邑はろの先祖たちと同じく變りてその子アマリアに代りて王とされり イスマエルの王アマリアの子ヨラムの十二年おエズの王ヨラムの子アマリアに聞り アマリアの位に即し時二十二歳にしてエラサレムおて一年世を治めたりの母ハイスラエルの王オマリの子孫に於て名をアマリヤといふ アマリアの家の道はわゆるアマリアの家のごとくおエズの前お悪をさせり是のれハアマリアの家の増なりければあり 妹アマリアの子ヨラム自身ゆきてアマリアの王ハサエルのラモラお戦ひけるがスリア人等ヨラムに傷を負せたり 是お於てヨラム王ハラの王ハサエルのラモラお戦ふおわたりてラマに於てスリア人お負せられたるどころの傷を療さんどてエズレに歸れりエズ王ヨラムの子アマリアの子ヨラムお病ををもてエズレに下りて之を請ふ

妹お預言者エリシヤ預言者の徒一人を呼てこれお言ふ汝腹をひまからげ此膏の瓶を手おどりてギレバアのラモラに往け 而して汝かしてお到らバエムシの子おるヨシヤバアの子エヒサを其處に尋獲て内お入り彼をろの兄弟の中より起まめて輿の間おつれゆき 膏の瓶をどりの首に灌ぎて言へエズバかく言たま汝汝膏をろうきて イスマエルの王おあすど而して戸を開きて逃されよ止るてど勿れ

是おいて預言者の僕なるもの少者ギレバアのラモラに往けるが 到りて見るに軍勢の長等坐してをりければ將軍よ我汝に告へ各事ありと言ふおエヒサて入て我傳語人の中の誰おかと言れば將軍よ汝にと言ふ

エヒサすなはち起て家お入りければ彼の首に膏をろうきて之お言ふイスマエルの神エホバかく言たま我汝膏をろうきて 民オスマエルの王おあす 汝ハラの王アマリアの家の聖壇をばす

ナ 卷三〇
 一 九
 二 九
 三 九
 四 九
 五 九
 六 九
 七 九
 八 九
 九 九
 十 九
 十一 九
 十二 九
 十三 九
 十四 九
 十五 九
 十六 九
 十七 九
 十八 九
 十九 九
 二十 九
 二十一 九
 二十二 九
 二十三 九
 二十四 九
 二十五 九
 二十六 九
 二十七 九
 二十八 九
 二十九 九
 三十 九
 三十一 九
 三十二 九
 三十三 九
 三十四 九
 三十五 九
 三十六 九
 三十七 九
 三十八 九
 三十九 九
 四十 九
 四十一 九
 四十二 九
 四十三 九
 四十四 九
 四十五 九
 四十六 九
 四十七 九
 四十八 九
 四十九 九
 五十 九
 五十一 九
 五十二 九
 五十三 九
 五十四 九
 五十五 九
 五十六 九
 五十七 九
 五十八 九
 五十九 九
 六十 九
 六十一 九
 六十二 九
 六十三 九
 六十四 九
 六十五 九
 六十六 九
 六十七 九
 六十八 九
 六十九 九
 七十 九
 七十一 九
 七十二 九
 七十三 九
 七十四 九
 七十五 九
 七十六 九
 七十七 九
 七十八 九
 七十九 九
 八十 九
 八十一 九
 八十二 九
 八十三 九
 八十四 九
 八十五 九
 八十六 九
 八十七 九
 八十八 九
 八十九 九
 九十 九
 九十一 九
 九十二 九
 九十三 九
 九十四 九
 九十五 九
 九十六 九
 九十七 九
 九十八 九
 九十九 九
 一百 九

べし其によりて我わが僕なる預言者等の血とエホバの諸の僕等の血をイセルの身に報いん アマリアの家に全く滅べしアアお屬する男イスマエルおわりて繋かれたる者も繋かれざる者もどわ之を絶べし 我アマリアの子ヤサアの子の家のごとくお爲しアエヤの子バシヤの家のごとくおなさん エズレの地に於て夫イセルを食ふべし亦これ繋るものありしと而して戸を開きて逃されり かくてエヒサの主の臣僕等の許にいできたりたれば一人之お言ふ本安かあるやこの狂者何のためお汝おきたりしやエヒサて入て汝等ハかの人を知りまらざるを知らざると言ふお 彼等言けり

く誠なり其を我僕お告よと是お島いてエヒサ言けるハ彼斯を我につげて言りエホバかく言たま我汝膏をろうきて イスマエルの王おあすと 彼等すあとも急ぎて各人の衣服をとりてこれを階の上エヒサの下お布き喇叭を吹てエヒサハ王たりと言り

エムシの子なるヨシヤバアの子エヒサヨラムお繋けり (ヨラムハイスラエルを盡くひきぬてギレバアのラモラに於てアマリアの王ハサエルを擲ぎたりしがヨラム王ハラの王アマリアの王ハサエルと戦ふ時おスリア人お負せられたるどころの傷を癒さんどてエズレにお歸りてをる) エヒサ言けるハ若なんぢらの心おかおあはば一人もこの邑より走いでてこれをエズレにお言ふ者なからしめよと エヒサすあすおエズレをばして乘往りヨラムかしてお臥をれバなりまたユダの王アマリアヨラムを訪下りてをる エズレの成機お一箇の守望者立をりしがエヒサの群衆のきたるを見て我群衆を見るを以ていければヨラム言ふ一人を馬に乘て遣し其お會しめて平安あるやと言しめよと 是に於いて一人馬にて行てこれに會ひ王かく言ふ本安かあるやと言ふにエヒサ言けるハ平安あり汝の與るよこならんや吾後おまこれと守望者お告て言ふ彼者かれらの許に往たるが歸り來すと 是を

一 五十六
 二 五十六
 三 五十六
 四 五十六
 五 五十六
 六 五十六
 七 五十六
 八 五十六
 九 五十六
 十 五十六
 十一 五十六
 十二 五十六
 十三 五十六
 十四 五十六
 十五 五十六
 十六 五十六
 十七 五十六
 十八 五十六
 十九 五十六
 二十 五十六
 二十一 五十六
 二十二 五十六
 二十三 五十六
 二十四 五十六
 二十五 五十六
 二十六 五十六
 二十七 五十六
 二十八 五十六
 二十九 五十六
 三十 五十六
 三十一 五十六
 三十二 五十六
 三十三 五十六
 三十四 五十六
 三十五 五十六
 三十六 五十六
 三十七 五十六
 三十八 五十六
 三十九 五十六
 四十 五十六
 四十一 五十六
 四十二 五十六
 四十三 五十六
 四十四 五十六
 四十五 五十六
 四十六 五十六
 四十七 五十六
 四十八 五十六
 四十九 五十六
 五十 五十六
 五十一 五十六
 五十二 五十六
 五十三 五十六
 五十四 五十六
 五十五 五十六
 五十六 五十六
 五十七 五十六
 五十八 五十六
 五十九 五十六
 六十 五十六
 六十一 五十六
 六十二 五十六
 六十三 五十六
 六十四 五十六
 六十五 五十六
 六十六 五十六
 六十七 五十六
 六十八 五十六
 六十九 五十六
 七十 五十六
 七十一 五十六
 七十二 五十六
 七十三 五十六
 七十四 五十六
 七十五 五十六
 七十六 五十六
 七十七 五十六
 七十八 五十六
 七十九 五十六
 八十 五十六
 八十一 五十六
 八十二 五十六
 八十三 五十六
 八十四 五十六
 八十五 五十六
 八十六 五十六
 八十七 五十六
 八十八 五十六
 八十九 五十六
 九十 五十六
 九十一 五十六
 九十二 五十六
 九十三 五十六
 九十四 五十六
 九十五 五十六
 九十六 五十六
 九十七 五十六
 九十八 五十六
 九十九 五十六
 一百 五十六

もて再び人を馬に遣はれ、その人からに到りて王かく宣ま、如何か變事あるやと言ふに、エトウ答えて、不安ハ汝の興るところならんや、吾後にぞ之れと言ふ。守望者た告て言ふ、彼等之所あまで到りし、歸り來するの車を趨するハ、エトウの子エトウが趨するに似狂ふて趨らせ來る。是に於いてヨラム車を整へよと言ひけるが車、整ひたれ、パイヤラムの王ヨラムとエズラの王アマハラ、あのかの車の車にて出たり、即ちかれらエトウにむかひて出きたり、エズラハ人ナボラの地にて之を會ける。ヨラム、エトウを見て、エトウよ平安あるや、といひたれ、エトウは、エトウの姦淫と、摩衛と、斯多かれば、何の平安あらんやと云り、ヨラム、すあ、ち手をもめらして、逃げアマハラにむかひ、反逆あり、アマハラよ、言ふに、エトウ手に弓をひき、まばりてヨラムの肩の間を射たれ、その矢、かれの心をいぬきて、出で、彼ハ車の中に僵じ、去つめり、エトウの將ビザカルに言ける、ハ、彼をとりて、エズラハ人ナボラの地の中に投ずて、其ハ汝憶ふべし、嘗て我ど故と二人ともに、乘て彼の父アマハラに從入る、船にエホバが斯か、れ、の事を預言またら、入り、曰く、エホバハ言ふ、誠に我昨日、ナボラの血、どのの子等の血を見たり、エホバハ言ふ、我この地において、汝にむくゆること、おらん、と、然、彼をとりて、その地になげすて、ヨラムの言のどく、にせよ、エズラの王アマハラ、これを視て、園の家の途より、逃ゆさける、ヨラムの後を追ひ、彼をも車の中に撃つらせ、と言ひ、しか、パイヤラムの邊なる、グラの坂にて、これを撃たれ、バキモツ、ま、で、逃ゆきて、其處に死り、その臣僕等、すな、ち、之を、車にのせて、エルサレムにたづさへ、ゆき、ダビラの邑に於いて、かれの墓に、その先祖等、とおなじく、これを葬れり、アマハラの子ヨラムの十一年に、アマハラ、エズラの王となり、し、なり、斯て、エトウ、エズラに、きたり、しか、パイヤラム、開てる、その目を塗り、髪をかざりて、怒り、望みける、が、エトウ、門に入、きたり、ければ、その主を、弑せしむ

7 王二十
8 王二十一
9 王二十二
10 王二十三
11 王二十四
12 王二十五
13 王二十六
14 王二十七
15 王二十八
16 王二十九
17 王三十

ユリよ平安なるやと言ひ、エトウは、すな、ち、面をわけて、怒に、むかひ、誰か、我に、興もの、ある、や、辭か、ある、や、と言ひ、ける、に、二、の、寺人、エトウ、を、望み、た、れ、彼を、投、お、と、せ、と、言ひ、す、す、な、ち、お、之、を、投、お、と、した、れ、バ、ラ、の、血、瀉、せ、馬、と、に、は、ど、ば、し、つ、け、り、エトウ、これ、を、踏、と、は、れ、り、斯て、彼、内、に、い、り、て、食、飢、を、な、し、而、して、言、け、る、ハ、往、て、かの、詛、は、れ、し、婦、を、見、て、れ、を、葬、れ、彼、ハ、王、の、女、子、な、れ、バ、なり、と、是、を、も、て、彼、を、葬、ら、ん、と、ぞ、得、て、見、る、に、その、頭、骨、と、是、と、嘗、と、あり、し、のみ、な、り、け、れ、バ、歸、り、て、彼、に、つ、る、に、彼、言、ふ、是、す、は、ち、エホバ、が、その、僕、なる、ヲ、シ、ム、人、エトウ、を、も、て、告、た、ま、ひ、し、言、な、り、云、く、エズラ、の、地、に、お、い、て、犬、イセム、の、肉、を、食、は、ん、イセム、の、屍、骸、ハ、エズラ、の、地、に、被、て、糞、土、の、ど、く、に、野、の、妻、に、お、る、べ、し、是、を、も、て、是、ハ、イセム、ナ、り、と、指、て、言、ふ、こと、能、さ、ら

1 王三十一
2 王三十二
3 王三十三
4 王三十四
5 王三十五
6 王三十六
7 王三十七
8 王三十八
9 王三十九
10 王四十

列王紀下

「アマハラ」に、七十人の子、あり、茲に、エトウ、書、を、た、た、り、め、て、サ、リ、ア、に、お、く、り、邑、の、收、伯、等、と、長老、等、と、アマハラ、の子、等、の、帥、傳、等、に、傳、へ、て、云、ふ、汝、の、主、の、子、等、故、ら、ん、と、も、に、お、り、又、汝、等、ハ、車、も、馬、も、城、も、あり、自、武、器、も、あ、れ、バ、此、書、故、ら、の、許、に、い、た、ら、バ、汝、の、主、の、子、等、の、中、よ、り、最、も、優、れる、方、正、き、者、を、選、ぶ、出、して、その、父、の、位、に、置、き、汝、等、の、主、の、家、の、た、め、に、戰、へ、よ、彼、ら、大、に、恐、れ、て、言、ふ、二、八、の、王、等、す、で、に、彼、に、當、る、こと、を、得、ざ、り、し、な、れ、バ、我、備、い、か、で、か、當、る、こと、を、得、ん、と、乃、チ、家、宰、巴、宰、長、老、帥、傳、等、エトウ、に、言、ふ、く、り、け、る、ハ、我、備、ハ、汝、の、僕、等、凡、て、故、が、我、備、に、命、ず、る、事、を、爲、ん、我、備、ハ、王、を、立、る、を、好、む、汝、の、目、に、善、と、思、ゆ、る、所、を、爲、せ、是、に、お、い、て、エトウ、再、度、か、れ、ら、に、書、を、お、く、り、て、云、ふ、汝、ら、も、し、我、に、興、き、我、言、に、ま、た、が、ふ、な、ら、バ、故、ら、の、主、の、子、なる、人、々、の、首、を、ど、り、て、明日、の、今、頃、エズラ、に、きた、り、て、吾、語、に、い、た、れ、と、當、馬、王、の、子、七、十、八、の、の、帥、傳、なる、邑、の、貴、人、等、と、も、に、居、る、その、書、か、れ、ら、に、至、り、し、か、バ、彼、等、王、の、子、等、を、ど、ら、へ、て、その、七、十、八、を、こ、と

1 王三十九
2 王四十
3 王四十一
4 王四十二
5 王四十三
6 王四十四
7 王四十五
8 王四十六
9 王四十七
10 王四十八

王に告て人衆王子等の首をたさへ来れりと言ければ明朝までろれを門の入口に二山に積かけと言ひ
 ごとく殺しらの首を懸につめてこれをエズルのエヒウの許につかはせりすなほち使者いたりてエヒ
 朝にかよび出て立ちあすべの民に言ふ汝等の義も我れが主にむきて之を滅したり然る此すべ
 の者等を殺せしハ誰なるや然バ汝等知れエズルがアハの家にきて告たまひしエズルの言りも
 地に隠す即ちエズルハの僕エリヤによりて告し事を成たまへんと斯てエヒウハの家に属する
 者のエズルに遺れるを盡く殺しまたうの一切の重立たる者の親き者、およびの祭司等を殺して彼
 に属する者一人も遺ざりきエヒウすなはち起て往てサマリヤに至りしがエヒウ途におる時牧者の
 集會所においてエズの王アハアの兄弟等に遣ひ汝等ハ何人なるやと言けるに我れハアハの兄弟
 なるが王子等と王母の子等の安否を問んとて下るなりと答へたれば彼等を生擒れと言ひ即ちかれら
 を生擒りらの集會所の穴の側にて彼等四十二人を盡く殺し一人をも遺ざりき斯てエヒウ其處より進
 むきし、カガの子ヨナダブの已を運にきたるに遣ければ彼の安否をよめてこれに故の心わが心の汝
 の心と同なるがごとくに眞實なるやと言けるにヨナダブ答へて眞實なりと言られたれば然らば故の手に我に
 伸よと言ひらの手を伸ければ彼を捉て已の車に登らちめて言ふ我れどもに來りて我がエズルに熱心な
 るを見よと斯かれを已の車に乗ちサマリヤにいたりてアハに屬する者のサマリヤに遺れるを盡く
 殺して遂にの一族を滅せりエズルハのエリヤに告たまひし言語のごとし茲にエヒウ氏をこそく集
 てこれに言けるハアハの少くバハに事たるがエヒウ大いにこれに事へんとす然ハ今バハの
 諸の預言者諸の臣僕諸の祭司等を我前に召せ一人も來らざる者なからしめよ我大なる祭祀をバハの

九百九十四
 九百九十五
 九百九十六
 九百九十七
 九百九十八
 九百九十九
 一千
 一千零一
 一千零二
 一千零三
 一千零四
 一千零五
 一千零六
 一千零七
 一千零八
 一千零九
 一千一十
 一千一十一
 一千一十二
 一千一十三
 一千一十四
 一千一十五
 一千一十六
 一千一十七
 一千一十八
 一千一十九
 一千二十
 一千二十一
 一千二十二
 一千二十三
 一千二十四
 一千二十五
 一千二十六
 一千二十七
 一千二十八
 一千二十九
 一千三十
 一千三十一
 一千三十二
 一千三十三
 一千三十四
 一千三十五
 一千三十六
 一千三十七
 一千三十八
 一千三十九
 一千四十
 一千四十一
 一千四十二
 一千四十三
 一千四十四
 一千四十五
 一千四十六
 一千四十七
 一千四十八
 一千四十九
 一千五十
 一千五十一
 一千五十二
 一千五十三
 一千五十四
 一千五十五
 一千五十六
 一千五十七
 一千五十八
 一千五十九
 一千六十
 一千六十一
 一千六十二
 一千六十三
 一千六十四
 一千六十五
 一千六十六
 一千六十七
 一千六十八
 一千六十九
 一千七十
 一千七十一
 一千七十二
 一千七十三
 一千七十四
 一千七十五
 一千七十六
 一千七十七
 一千七十八
 一千七十九
 一千八十
 一千八十一
 一千八十二
 一千八十三
 一千八十四
 一千八十五
 一千八十六
 一千八十七
 一千八十八
 一千八十九
 一千九十
 一千九十一
 一千九十二
 一千九十三
 一千九十四
 一千九十五
 一千九十六
 一千九十七
 一千九十八
 一千九十九
 二千

ためになさんとするなり凡て來りざる者と生じおかに但しエヒウバハの僕等を滅さんとして斯
 なせるなりエヒウすなはちバハの祭祀を盡く言ければ之を宣たり是てエヒウのまねくイヌラ
 かに人をつかはしたればバハの僕たる者皆きたれ一人も來らずして遺れるものあらざりき彼等バ
 ハの家にいたりたればバハの家の末より來て充れたれ一時にエヒウ衣裳を穿る者にむかひ禮服
 をとりいだしてバハの凡の僕等にあたへよといひければすなはち禮服をとりいだせり斯ありてエヒ
 ウレカガの子ヨナダブどもにバハの家にいらしバハの僕等に言ふ汝等專見て此にハバハ
 ルの僕のみあらしめエズルハの僕一人も汝らの中にあらしめざれと彼等犧牲と祭祀を盡くして入し
 エヒウ八十人の者を外に置いて言ふ凡てわがりの手にわたすとこの人一人にても逃れしむ者ハ己の
 生命をもてこの人の生命に代べしと斯て祭祀を獻るこの終りも時エヒウの士卒と諸將に言ふ入て
 かれらを生かせ一人をも出すなかれす亦はち刃をもて彼等を撃てなせり而して士卒と諸將これを扱いた
 してバハの内庭に入り諸の僕をバハの家よりとりいだしてこれを焼り即ちかれらバハの
 像をてばちバハの家をてばち其をもて厨を造りしが今日までこのエヒウかくイヌラエルの中より
 バハを絶ざりたりしかどもエヒウ尙かのイヌラエルに罪を犯させたるヲバハの子ヤバハの罪
 に離るよとせざりき即ち彼等はエズルとアハにわたるとこの金の價に事たりエズルハエヒウに言
 たまひけらく汝わが義と禱るところの事を行ふにあたりて善く事をなすむわが心なる諸の事をアハ
 ヲの家になしたれば汝の子孫ハ四代までイヌラエルの位に坐せんと然るにエヒウハ心を盡してイヌラ
 エルの神エズルの律法をおておはんとせしめ尙かのイヌラエルに罪を犯させたるヤバハの罪に離れ

二千零一
 二千零二
 二千零三
 二千零四
 二千零五
 二千零六
 二千零七
 二千零八
 二千零九
 二千一十
 二千一十一
 二千一十二
 二千一十三
 二千一十四
 二千一十五
 二千一十六
 二千一十七
 二千一十八
 二千一十九
 二千二十
 二千二十一
 二千二十二
 二千二十三
 二千二十四
 二千二十五
 二千二十六
 二千二十七
 二千二十八
 二千二十九
 二千三十
 二千三十一
 二千三十二
 二千三十三
 二千三十四
 二千三十五
 二千三十六
 二千三十七
 二千三十八
 二千三十九
 二千四十
 二千四十一
 二千四十二
 二千四十三
 二千四十四
 二千四十五
 二千四十六
 二千四十七
 二千四十八
 二千四十九
 二千五十
 二千五十一
 二千五十二
 二千五十三
 二千五十四
 二千五十五
 二千五十六
 二千五十七
 二千五十八
 二千五十九
 二千六十
 二千六十一
 二千六十二
 二千六十三
 二千六十四
 二千六十五
 二千六十六
 二千六十七
 二千六十八
 二千六十九
 二千七十
 二千七十一
 二千七十二
 二千七十三
 二千七十四
 二千七十五
 二千七十六
 二千七十七
 二千七十八
 二千七十九
 二千八十
 二千八十一
 二千八十二
 二千八十三
 二千八十四
 二千八十五
 二千八十六
 二千八十七
 二千八十八
 二千八十九
 二千九十
 二千九十一
 二千九十二
 二千九十三
 二千九十四
 二千九十五
 二千九十六
 二千九十七
 二千九十八
 二千九十九
 三千